

上海だより

上海日本人学校
浦東（プードン）校

松井的上海

第1号
平成31年4月7日
発行者 松井 明

はじめまして

2, 3年生の皆さん、お久しぶりです。1年生の皆さんは初めてですね。私はこの3月まで城北中学校でお世話になっていた松井 明（まつい あきら）です。4月から城北中学校に籍をおいて、中華人民共和国の上海市にある上海日本人学校 浦東（プードン）校に赴任しています。妻と息子の3人で上海に住み始めました。

時々、こちらの様子を「上海だより」として、皆さんに届けようと思います。

上海に着きました

4月5日（木）の9時40分、成田空港発の飛行機に乗り、3時間20分かけて上海へ。上海浦東空港に12時に到着しました。ここで、「あれっ、おかしいな」と思った人は素晴らしい！「なるほど、そういうことか」と思った人はもっと素晴らしい！！日本と上海には1時間の時差があります。日本時間から-1時間です。皆さんの給食準備開始時間の12時35分は上海では11時35分ということです。

上海に来てまず驚いたのは、上海は大都市ということです。日本人学校の先生は、上海市のいくつかの公寓（こうぐう・日本でいうマンション）に分かれて住んでいます。私と家族が住んでいる公寓は高層ビルの中にあり、田舎者の私は、気持ちがなかなか落ち着きません。上海の都会ぶりは改めて紹介します。



私の部屋のベランダからの風景

上海の人はとても優しい

城北中のみなさんに、まず伝えたいのは、上海の人はとても優しいということです。今までの私は、中国の人は声が大きく、自分のことだけを主張し、マナーを守らず、目的のためならガンガン進む・・・、という勝手なイメージでした。こちらに来て3日目に入りましたが、上海の人はとても優しいです。感動するほど優しいです。私たちが実際に目の当たりにした出来事を2つ。

1つ目は、地下鉄に乗っていた時です。上海では、お年寄りや子どもには積極的に席をゆずると聞いてはいましたが、そのゆずり方がすごい。お年寄りや子どもが乗ると、それを見ると大きく手招きをして「この席にすわって！」と言って席をゆずります。日本ではさりげなく席を立つか、席をゆずらない人も多い中、上海の人の優しさを感じました。

2つ目は、家族で買い物へ行った時です。私たちはヤクルトを買おうとしていたのですが、なかなか見つかりません。やっと見つけたヤクルトですが、なぜかジュース屋のショーケースに並んでいます。私たちは当然、中国語は話せないので、カタコトの英語と身振りでヤクルトが欲しいと話しますが、店員さんはヤクルトを売ってくれません。そこへ、通りすがりの中年の中国人男性が困っている私たちを見て、カタコトの日本語で私たちに話しかけてくれました。そして、中国語で店員さんとやり取りして、このヤクルトはジュースに入れて販売するもので、これだけでは売れないことを私たちに日本語で説明してくれました。その後、ヤクルトが売っているところまで私たちを案内してくれました。私たちはもう感動です。「謝謝（シェイシェイ・ありがとう）」と何度もお礼を言いました。

私もこの3年間で中国語を勉強して、日本で困っている中国の人を助けられるようにしたいと思いました。

私が見て感じた上海の様子をお届けします。お楽しみに！

日本人学校も新学期が始まりました

城北中学校では1学期がスタートしていると思います。こちらは10日に始業式が行われ、11日が入学式でした。日本のように4月に始業式が始まるのは、実は世界的に見て珍しいんですよ。中国の現地校（中国の人が通う学校）は9月が新学期スタートです。中国では、もうすぐ3学期だそうです。

そして、上海日本人学校浦東校は小学部と中学部と一緒に始業式や入学式を行うので、全員が立つ号令は、中学校では「全員起立！」ですが、小学部1年生もいるので、「みなさん、立ちましょう」という号令でした。かわいらしい不思議な感じがしました。

お金について

中国のお金は「元（げん）」という単位です。紙幣は100元から1元まで6種類。貨幣は1元から2分まで5種類が流通しているそうです。写真には、5分と2分がありませんが、私はまだ見たことがありません。

アメリカのお金の単位はドルで、省略記号は「\$」ですが、元の省略記号は「¥」です。日本の円の省略記号「¥」と同じなのです。まぎらわしく、注意しないといけません。ただここは中国なので当然、「元」ということです。

中国の「¥」の表示を見ると日本がなつかしくなります。

ちなみに、1元は16円～17円くらいです。変動相場制なので、日によってお金の価値は変わります。



実は現金は・・・

特に上海では、現金があまり流通していません。スマホ決済が主流です。日本ではテレビでよく「Pay Pay」のCMをやっていますよね（私が日本を出るまでは頻繁にCMをしていました）。「楽天Pay」や「LINE Pay」もあります。あれがスマホ決済です。それでも、日本では現金が主流です。中国では、財布は持ち歩かないそうです。スマホで買い物や食事の全てができるそうです。

先日、中国の事務員さんと一緒に銀行に行き、20枚の100元紙幣を出したところ大笑いされました。中国でこんなに大量の紙幣を持っている人はまずいないそうです。

現金で買い物をすると、店員さんが渡した紙幣をじっくり確認します。現金を受け取ってもらえず、買い物ができなかつたらどうしようとドキドキしますが、現金でもしっかり買い物ができます。



日本人学校とは

日本人学校は、国外に住む日本人児童・生徒を対象に日本国内の小・中学校と同等の教育を行う学校です。世界約50カ国に約90校あります。日本と同等の教育を行うので、日本人の先生が日本と同じ教科を、日本の教科書で教えています。児童生徒は、北海道から沖縄まで全国各地から来ていますし、先生も全国各地から来ています。そして、日本人学校で学ぶ児童生徒は、全員日本人とは限りません。日本の教育システムに興味を持っている現地の児童生徒も学ぶことができます。また、国籍は日本ですが、保護者の仕事の関係で、世界の日本人学校や現地の学校に通って、日本の学校に通ったことがない児童生徒もいます。

全国各地、世界各国から集まった児童生徒、先生方で協力しながら学校生活を送っているのが日本人学校です。

上海日本人学校浦東校について ①

小学部（小学校）の児童が約570名、中学部（中学校）の生徒が約490名、合計約1060名の児童生徒がいます。教員が70名、英語や中国語の講師の先生、事務員さんや門衛（警備）の職員を合わせると、教職員は約130名です。とても大きな学校です。基本的に日本の学校のシステムで日本の小中学校と同じ勉強をしています。しかし、上海日本人学校ならではの事柄もあります。

○上海市全域から集まっている

上海市はとても広いです。人が多く住んでいる地域だけでも東京都の2倍くらいの面積があります。そのような広範囲から児童生徒が通っています。実は上海には2つの日本人学校があります。1つは私が勤務している浦東校（プードン校）と、もう一つが虹橋校（ホンチャオ校）です。虹橋校は小学部だけで、浦東校は小学部と中学部があります。中学部は浦東校にしかないので、中学部の生徒（中学生）は上海市全域から通っています。スクールバスで片道2時間近く（往復3時間以上）かけて毎日学校へ通っている生徒もいます。

日本の学校と違うところが、まだたくさんあるので、次の機会に紹介します。



上海日本人学校浦東校 全景

上海だより

上越市立城北中学校生徒向けたより

上海日本人学校
浦東（プードン）校

松井的上海

号外
令和元年7月22日
発行者 松井 明

先日 Yahoo ニュースで、私が勤務している上海日本人学校浦東校の姉妹校である虹橋校のことが記事になっていました。もともと上海日本人学校は一つでしたが、あまりにも児童・生徒数が増えたため、虹橋校（小学部のみ）と浦東校（小学部と中学部）の2つに分かれたのです。そのような経緯もあり、この2校は組織やシステムがほぼ同じです。

以下は、Yahoo ニュースの引用ですが、私が勤務している学校の様子をイメージしてもらえたらと思います。

大型バス 34 台で送迎！ 中国・上海の“世界最大級”日本人学校に行ってきた

2019 7/17(水) 11:32 配信

FNN PRIME

厳しいセキュリティ

閑静な住宅街の中に堅く閉じられた門。壁の上にそびえ立つ鉄条網。入り口の大きな看板には、4 カ国語で書かれた関係者以外を制限するメッセージ。ここは、中国・上海にある日本人小学校、上海虹橋校である。



海外にある日本人学校は、日本国籍の生徒を対象に、文科省に認可され国内と同等の教育を受けられる学校。ここ上海の日本人学校は、世界95校ある日本人学校の中で唯一高校ももつ最大級のもの。特に虹橋校は小学校として児童数が1100人以上と単体としては世界最大だという。

入り口で厳しいセキュリティチェックを受けた。全員が事前申請する必要だけではなく、出る時も受け入れ担当者のサインがないと出られない。すべては安全のためだ。

今回我々が訪れたのは、出前授業、アナウンサー先生＝「あなせん」を行うため。

「あなせん」はコミュニケーション能力向上のために話し方のプロであるフジテレビのアナウンサーが行う社会貢献活動で、関東エリアを中心に 200 カ所以上で行ってきているが、今回は、過去に依頼をいただいた先生が上海赴任になり、是非上海にもとオファーをくれたもの。

対象は全校生徒。佐々木恭子アナウンサーと上中勇樹アナウンサーが学年に合わせて授業を行った。

「あなせん」にとっては初の海外進出。虹橋校にとっても初のメディアによる出前授業だというが、そこは日本らしさと中国らしさが混在する場所だった。

中国の中の“日本”

虹橋校の中に入ると、日本国内にいるようで、いない。校舎の雰囲気は日本そのもの。

生徒たちはみな明るい声で挨拶する。玄関にビシッと並べられた靴はいつも中国人の客たちを驚かせるという。休憩時間は黙々と丁寧に「無言清掃」。これも日本の学校ならではの光景だ。中国語の授業は週 1 回行われるが、学校の中で使う言葉は全部日本語だ。



校門周辺の鉄条網や 24 時間厳しい警備体制も中国ならではのもの。中庭の日の丸の掲揚台もあまり刺激とならないように設計されているようだ。

上海にある日本人学校は企業の進出でどんどん児童数が増えていったが、日中関係が悪化した 2012 年、13 年あたりをピークに児童数が減り続け、最近はまだ下げ止まっているという。

児童は全員日本国籍を持つが、両親のどちらかが日本国籍ではない児童の割合は 10 年前の約 1 割から現在の約 3 割に増え、中国との結びつきがますます強くなっている。

“学力の高い”学校

授業を行っていてその受け答えを見てもそうだが、とにかく児童たちは活発で優秀。日本人の礼儀正しさもありながら、中国で育った影響か、自己アピールが上手で前向き！

学校の先生に聞くと、やはり学力テストの平均点数が国内最高レベルの地域よりもさらに 5 点から 10 点高い、都内の中堅私立以上の学力をもつという。理由はいろいろ考えられるが、異国で生活する、多様性のある環境で育つことは子どもの成長にいいと考えさせられた。

しかし”中国色“もあちらこちら。校庭前には“空気看板”がある。中国政府が発表した空気の汚染数値を基にわかりやすく色で表している。我々が訪れた日は“緑”で自由に遊べる日だが、“赤”だと校庭に出られなかったり、“茶”でそもそも休校しなければならないこともあったとか。



圧巻の下校風景！34 台大型バスで送迎

児童の多くは日本人街で暮らしている。下校時間になり、34 台の大型のスクールバスが次々と子どもたちを自宅へ送り出す。窓越しにみんな溢れんばかりの笑顔で手を振ってくれた。休憩時間にたくさん寄ってきてくれて、いろんな話をしてくれたことを思い出しながら我々も手を降り続けた。



駐在員たちを親にもつ宿命でもあるが、1 年に 100 人も入れ替わるというこの学校で、出会いは貴重なもの。だからみんな一瞬一瞬大事にという思いがあるかもしれない。

日本人学校、そして中国での生活も長い人生の中で短い期間かもしれないが、その経験がきっと彼らの中に深くしみこんでいるもの。日中、日本と世界の架け橋になることを切に願いたい。

【活動後記:フジテレビアナウンサー 佐々木恭子】

同行した身から、一言だけ添えさせていただきたい。

訪問の最後に、校長先生がこのようなことをおっしゃっていた。

それは、海外にある日本人学校の存在意義そのもののように思う。

「親の赴任に伴う帯同で、望まず、日本に残りたいと泣きながらここに転入してくる子たちも多い。入学から卒業まで在籍する子は 3 割ほどしかいない。だからこそ、ここでの経験が素晴らしいものになるように、将来に結びついていくように、先生たちの努力はもちろんだが、それだけでは成り立ちません。ご家族、上海在住の日本人の方々、そして何より中国人社会の協力が不可欠であり、社会総ぐるみで取り組む必要があるのです。」

それを具体化するために、実際に、上海にある日本企業の見学を積極的に実施し、様々な仕事を見せるとともに、中国獅子舞を習うなど、中国文化に触れる課外授業を取り入れ、中国の子どもたちとの交流も年に一回続けている。

異文化があたりまえにあり、日々多様性に接する彼ら。また、距離が近いとはいえ、外国で暮らす緊張も楽しみも味わう彼ら。

日本で行う「あなせん」以上に、「(日本の)アナウンサーがやってきた」ことに興味を示し、一緒に過ごす時間を味わい尽くしてくれたように思う。

虹の橋という地名に由来する学校の名前のとおり、日中の架け橋になる道を切り拓いていくと、子らの強い眼差しをみて確信した。

上海だより

上越市立城北中学校生徒向けたより

第4号

上海日本人学校
浦東（プードン）校

松井的上海

令和元年 10月 29日
発行者 松井 明

城北中のみなさん、お久しぶりです。先日のスタートライン公演、合唱祭お疲れさまでした。城北中のホームページで皆さんの活躍を見させてもらっています。

さて、先日、家族で電車に乗っていたときの事です。その車内は、とても混雑していて、停車する駅ごとに人がどんどん乗ってくる状態でした。しばらくすると、もうすぐ私たちが降りる駅です。運悪く、私たちは開くドアの反対側にいました。ぎゅうぎゅう詰めの車内。息子は座席に座っていましたが、私と妻は立った状態です。

私たち家族は、駅に着いたらどのようにして降りるか作戦を考え、日本語でやり取りしました。

「駅に着いたらどうやって降りる?」「不好意思(ブーハオイー ス:中国語で『すみません』の意味)って言って人混みをかき分けていけばいいんじゃないかな?」「今から少しずつ動き始めた方がいいかな?」

「じゃあ、健介(私の息子)の席を誰かに譲って、少しずつ動こう」と、息子を立たせ、近くにいた中国人親子に席をゆずると、そのお父さんが「あ・り・が・と・う」とカタコトの日本語で言うではありませんか。

「あれっ?!日本語しゃべれるんですか?」と聞き返すと、今度はそのお母さんが「あ・り・が・と・う」とカタコトの日本語で言うのです。そうこうしているうちに、電車は駅に着いてしまい、我々は「不好意思(ブーハオイー ス)」と言いながら、人混みをかき分け、電車を降りることができました。電車を降りてから、「あの中国人親子は、私たちの満員電車下車作戦を一部始終聞いて理解していたのかも」と思うと少し恥ずかしくなりました。

実は私たちが上海に来てから、このように中国の人からいきなり日本語で話しかけられることが何度もあります。中国の人は、日本好きな人が意外に多いです。そして、日本語を勉強している人も多いです。理由を聞くと、日本のアニメに興味をもって、日本文化に興味をもったり、日本語を勉強したりしているそうです。

この前、映画館の前を歩いていた、「名探偵コナン(中国名:名偵探柯南)」のポスターがありました。息子が「名探偵コナン」が好きということもあり、家族で「名探偵コナン」を観に映画館へ行きました。音声は日本語で、字幕が中国語。日本人の私にとっては日本語で映画を観ることができたので、日本で映画を観ているように楽しむことができました。

ちなみに、「千と千尋の神隠し(中国名:千与千尋)」がこの6月に中国で公開となり、話題になっていました。もうすぐ、日本でこの夏に話題になった「天気の子(中国名:天气之子)」が中国で公開されるそうです。中国では外国の映画は直前まで公開日を予告しないそうですが、年内には公開されるようです。とても楽しみです。



みなさん、お久しぶりです！

新型コロナウイルスの影響で長い間、更新できずに申し訳ありませんでした。現在は学校が再開されているものの、厳しい防疫体制の中で、今までのような授業や行事ができない状態が続いています。城北中学校の学校だよりでも紹介させていただきましたが、現在も防疫体制は続いています。

学校だよりと重なる部分もありますが、今の上海日本人学校の授業の様子をお知らせさせていただきます。

上海日本人学校浦東校の現在

上海では新型コロナウイルスの影響が1月下旬から出始め、2月は街にほとんど人や車が見られない状態でしたが、3月に入ると徐々に街に活気が戻り、現在は、ほぼ通常の生活が送れるようになってきています。そのような中、上海日本人学校は1月23日から約4か月間休校になりました。ようやく5月28日にプレ開校という形で学校を再開し、6月8日には本開校を迎え、始業式と入学式を迎えました。

しかし、開校したとはいうものの、感染症対策の規制は厳しく、通常の学校生活を送れていません。今までは多くの生徒がスクールバスで登校しましたが、感染症対策の影響でスクールバスが運行できず、生徒全員が保護者の送迎で登下校しています。保護者と一緒に、タクシーや地下鉄で片道1時間以上かけて通学している生徒もたくさんいます。校門前では1m間隔で並び、校門でサーモグラフィーを使って検温を行います。体温が37.0℃以上の場合は検温スペースで再検温をし、そこでも体温が37.0℃以上だった場合は、その日の授業を受けることができません。生徒玄関で上履きにはきかえたら、下足を袋に入れて教室に向かいます。靴箱は使えません。教室のロッカーや棚も使えず、自分の机の横に荷物をかけます。人と1m以上の距離を保ち、教室では自分の席で静かに過ごします。階段や廊下は一方通行で、友だちと並んで歩いたりせず、前後の人と1m以上の間隔を意識しながら移動をします。

校内では、常に1m以上の距離をとります。授業の道具や上履きなどの私物は毎日持ち帰ります。衛生上の理由から、ごみ箱は撤去されており、生徒はご

み袋を持参し、自分のごみは自分で持ち帰ります。弁当を食べる以外は、必ずマスクを着用します。トイレから教室へ戻るときも必ずアルコール消毒をします。弁当を食べる前、手洗いを念入りにした後もアルコール消毒をします。生徒は1日で10回以上はアルコール消毒をしていることとなります。生徒は原則、自分の席で過ごすかトイレへ行くことしかできません。生徒が下校した後、毎日専門業者が入り、使用した教室や廊下の全てを消毒します。学校全体で、積極的に感染症対策を行い、上海市からの開校の許可をもらっています。

そして何より、現在、本来いるべき先生が半分の数しかいません。日本と中国ではお互い入国制限があるため、今年度赴任するはずだった全ての先生が、まだ赴任できていません。上海に残っている教職員だけで、感染症対策と日常の学校業務を行っています。そのため、毎日の授業は、別教室で先生が一人で授業を行い、それを複数のクラスへライブ配信をして行っています。日本にいる赴任出来ていない先生には、日本で授業をしてもらい、複数のクラスへライブ配信して授業を行っています。入国禁止前に日本へ一時帰国して、その後、上海へ戻れなくなっている生徒もまだたくさんいます。

新型コロナウイルスの感染者は、中国では少なくなってきました。ただし、第2波、第3波への警戒が必要です。学校は規制を守りつつ、試行錯誤しながら授業や学校生活を送っている状態です。はやく、世界的な混乱が収まり、当たり前の日常が戻ってくることを願っています。そして、その日が来るまで、生徒と先生、そして事務スタッフが一丸となって、これからもがんばります。



撮影教室

教室で一人で授業を行います。タブレットを通して各教室と画像と音声のやりとりができます。



授業教室

スクリーンに映った先生の授業を視聴しながら学習に取り組みます。生徒は発言も可能です。

通常の授業スタイルが可能になりました！

今まで、上海日本人学校では定員の半分の数の先生しかおらず、一人で同時に複数の学級を担当しないと授業ができませんでした。そのため、生徒も先生も学校へ登校しているものの、オンライン授業で学習するという環境でした。

9月から日本から中国への入国に関わるビザ(入国査証:外国に入るときに、その国から出される「入国していいですよ」という許可)の発行の制限が緩和されたことにより、4月に赴任予定だった先生方が2週間の施設隔離を終えて、ようやく10月から上海日本人学校への勤務が始まりました。予定されていた先生方が勤務できることにより、オンライン授業から1人の先生が1つの学級の授業を行う対面授業(通常の授業スタイル)が可能になりました。画面越しでなく、先生と生徒がお互い目の前にいる喜びと楽しさを実感しながら、授業が行われています。

しかし、新型コロナウイルス感染予防対策は厳しく続いています。一日が終わると毎日、学校に業者の消毒が入るため、学習道具や内履きも含めた私物を学校に置いて帰ってはいけない状況や、生徒や職員以外は保護者も含め校内に入校できない状況などは変わりません。その中で、ビザの緩和により、日本に足止めされていた生徒も、上海へどんどん戻ってきています。上海日本人学校も、生徒も先生も人数が増え、活気があふれてきています。



上海ガニの季節です！

上海は地方都市から多くの人働きに来ているので、様々な地域の料理があります。その中で、今が一番おいしいのは「大闸蟹」（ダージャーシエ），いわゆる「上海ガニ」です。オスとメスで味が違い，メスはお腹に卵（内子）を抱えた10月～11月頃、オスは大きくミソが育った11月～12月頃が食べ頃と言われています。甘みのあるしっとりとした蟹肉や、濃厚な蟹ミソがたまりません。先日，市場で上海ガニを購入し，自宅で蒸して食べました。



近所の市場の上海ガニの専門店



生きたまま大きさに別に販売



向かって左がオス，右がメス



買ったお店でカニを縛ってくれます。家で15分間蒸すだけ。



上がオス，下がメス。
お腹の様子が違います。



オス，メスともに濃厚な蟹ミソがたっぷりです。

上海だより

上越市立城北中学校生徒向けたより

上海日本人学校

浦東（プードン）校

松井的上海

第8号

令和3年1月4日

発行者 松井 明

あけましておめでとうございます

みなさんはどのようなお正月を過ごしましたか？中国のお正月は普通の休日です。1月1日が祝日で、2日からは通常の学校や仕事が始まります（今年は2日と3日が土日だったので3連休になりました）。中国のお正月は2月の春節がメインです。春節については、のちほどお知らせします。

ショーロンポーは上海発祥の料理です

上海には伝統的な料理がいくつかありますが、世界的に有名な料理は「ショーロンポー小籠包」（中国名は「シャオロンバオ小籠包」）です。上海市の南翔が発祥と言われ、上海市内にもたくさんの専門店があります。小さな皮の中に豚肉の具が入っており、せいろ蒸籠で蒸して提供されます。味もシェンロウ鮮肉（豚肉）やシエロウ蟹肉（カニの身）、シャーレン虾仁（エビのむき身）など、たくさんの味が楽しめます。

小籠包は皮の中に肉汁のスープがたっぷり入っているので、レンゲに小籠包を乗せて箸で皮を破り、肉汁を冷ましながら吸って、最後に小籠包を食べます。

いつもは自宅近くのレストランで食べることが多いですが、地下鉄で1時間かけて南翔まで行き小籠包を食べました。この日は特に寒く（外気は-6℃）、アツアツの小籠包で体を温めました。



ここが小籠包発祥のお店と
言われています



小籠包の中はたくさんの肉汁
のスープがあふれています



よく冷まして食べないと
口の中がやけどします

上海だより

上越市立城北中学校生徒向けたより

上海日本人学校
浦東（プードン）校

松井的上海

第9号

令和3年2月3日
発行者 松井 明

シンニエンクワイラ

新年快乐（あけましておめでとうございます）

春節（^{チュンジエ}春节）とは中国のお正月です。中国の1月1日は祝日ですが大きな祝い事は行いません。中国のお正月は2月の春節がメインです。そして、中国だけではなく全世界の中国人にとって最も大切な伝統的な祝いの期間です。春節は家族で過ごすのが一般的で、地方から来ている人は地元に戻って春節を過ごすので人々が大移動します。多くの人は約一週間の連休になります。今年は、2月11日が大晦日（^{シューシー}徐夕）で、2月12日～2月17日が春節です。上海日本人学校もこの期間は休校になります。

春節が近づくと人々は年越し用品を買い、大晦日には家族みんなそろって夕食を食べます。そして吉祥とおめでたい気分を表す絵や対聯（^{つうれん}おめでたい言葉を赤い紙に書き、門や入り口の框に貼るもので新年を祝い邪気を払う言葉を書く）を掛けたり、部屋を飾ったりして新しい年を迎えます。食卓には、盛りだくさんな食べ物が並びます。街の至る所が飾り付けされ、互いに新年の挨拶を交わします。

数年前までは、爆竹を鳴らして新年を祝っていたそうですが、騒音と煙による大気汚染が問題となり、上海市では街中で爆竹を鳴らす行為は禁止されています。

また、今年は新型コロナウイルスの影響で、大都市から地方への移動は大幅に制限されています。どうしても地方へ帰らなければならない場合は、中国国内の移動でも事前のPCR検査が義務付けられています。



上海の観光地である豫園（よえん）の飾りです。（昨年の春節）



街のお店にはたくさんの春節用の飾りが売られています。



私の部屋の入り口です。対聯（つうれん）で飾りつけしました。（昨年度の春節）

上海通信

上越市立城北中学校生徒向け通信

上海日本人学校

浦東（プードン）校

松井的上海

第10号

令和3年4月7日

発行者 松井 明

進級・入学おめでとうございます

2, 3年生の皆さん、進級おめでとうございます。1年生の皆さん、入学おめでとうございます。私は城北中学校に籍を置いて、中国の上海にある上海日本人学校 浦東（プードン）校に勤務している松井 明（まつい あきら）です。妻と息子の3人で上海に住んでいます。上海生活は3年目になりました。今年度も、こちらの様子を「上海通信」として、皆さんに届けようと思います。



上海（シャンハイ）とは

上海は、成田空港から飛行機で3時間くらいです。日本とは時差があり、日本の時間より1時間遅れています。日本が朝の8時なら、上海は朝の7時です。緯度は鹿児島県と同じくらいですが、大陸特有の気候で、寒暖の差が激しいです。四季はありますが、春と秋が短く、夏は蒸し暑い日が続く、冬は晴天が多いですがとても寒いです。雪はほとんど降りません。

上海は中国最大の経済都市です。中国の首都は北京（ベイジン:日本語ではペキンと読みますが、中国語ではベイジンと読みます）ですが、北京は政治都市です。北京にくらべ上海の方が都市としては大きいです。また上海は、歴史的な理由から外国人が多い国際都市で、上海の人々も私たちのような外国人にとっても慣れていています。



この通信は第3号(令和元年7月1日発行)を加筆修正したものです

日本人学校とは

日本人学校は、国外に住む日本人児童・生徒を対象に日本国内の小・中学校と同等の教育を行う学校です。世界約50カ国に約90校あります。日本と同等の教育を行うので、日本人の先生が日本と同じ教科を、日本の教科書で教えています。児童生徒は、北海道から沖縄まで全国各地から来ていますし、先生も全国各地から来ています。そして、日本人学校で学ぶ児童生徒の多くは、親の仕事のため海外で生活している日本の子どもたちです。また、日本の教育システムに興味を持っている現地の児童生徒も学ぶことができます。中には、国籍は日本ですが、保護者が世界中をまわる仕事で、世界の日本人学校や現地の学校に通って、日本の学校に通ったことがない児童生徒もいます。先日も中学部の生徒で、コロナの影響のため日本で一時帰国をしたとき、産まれてはじめて日本の学校に通い、給食が美味しく感動したと友達に話をしていた生徒がいました。

全国各地、世界各国から集まった児童生徒、先生方で協力しながら学校生活を送っているのが日本人学校です。

上海日本人学校浦東校について

小学部（小学校）の児童が約350名、中学部（中学校）の生徒が約410名、合計約760名の児童生徒がいます。新型コロナウイルスの影響でかなり減ってしまいました。教員が70名、英語や中国語の講師の先生、事務員さんや門衛（警備）の職員を合わせると、教職員は約130名です。とても大きな学校です。基本的に日本の学校のシステムで日本の小中学校と同じ勉強をしています。

上海市全域から集まっている

上海市はとても広いです。人が多く住んでいる地域だけでも東京都の2倍くらいの面積があります。そのような広範囲から児童生徒が通っています。実は上海には2つの日本人学校があります。1つは私が勤務している浦東校（プードン校）、もう一つが虹橋校（ホンチャオ校）です。虹橋校は小学部だけで、浦東校は小学部と中学部があります。中学部は浦東校にしかないのも、中学部の生徒（中学生）は上海市全域から通っています。スクールバスで片道2時間近く（往復3時間以上）かけて毎日学校へ通っている生徒もいます。



上海日本人学校浦東校 全景

中華料理と言えば・・・① ラーメン

日本で中華料理と言えば、まず一番に発想するのがラーメンでしょう。中国でラーメンは拉面（ラーミエン）と言います。「拉」は中国語で「引っ張る」の意味です。「麵」は「面」と書き「ミエン」と読みます。つまり「拉面」は引っ張る麵という意味です。「拉面」の麵は小麦粉をよくこねて引っ張って麵を作ります。中国は国土が広大なので、中国にはたくさんの種類の麵があります。中国の麵は一般的に小麦粉・米粉・緑豆でんぷんのいずれかから作られます。「面」は小麦粉から作られた麵のことです。拉面の他に、刀削面（ダオシャオミエン） などがあります。粉（フン）は、米粉や緑豆でんぷんから作られた麵のことです。米を原料とした米粉（ミーフン）、河粉（ファーフン）、緑豆を原料とした粉絲（フェンスー）などの麵があります。

ちなみに、皆さんが日本で食べているラーメンは、先ほど紹介した拉面とは違います。日式拉面（リーシーラーミエン）として、別の食べ物として売られています。上海には「一風堂」や「麵屋 武蔵」など日本の有名ラーメンチェーン店も数多く出店して、いつも多くの人々で賑わっており、日本のラーメンも大人気です。



拉面（ラーミエン）
原料：小麦粉



刀削面（ダオシャオミエン）
原料：小麦粉



米粉（ミーフン）
原料：米粉（こめこ）



河粉（ファーフン）
原料：米粉



粉絲（フェンスー）
原料：緑豆（りょくとう）



日式拉面（リーシーラーミエン）
原料：小麦粉

中国の拉面も美味しいですが、日本のラーメンを日本で食べたいですね！

新型コロナウイルスの感染対策について

みなさん、お久しぶりです！

しばらく更新できずに申し訳ありませんでした。

私が住んでいる建物は、日本人をはじめ、多くの外国人が住んでいます。部屋の設備にインターネットテレビが設置されており、日本のテレビ番組をリアルタイムで観ることができます。また、時々インターネットのニュースで上越の話題も見えています。

その中で心配なのが、最近の日本の新型コロナ感染者の増加です。全国各地で緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が発出されたり、新潟でも感染者が増えたり、そのようなニュースを見聞きすると、城北中の皆さんのことが気がかりでなりません。

上海日本人学校は、例年通り、8月16日から2学期が始まりました。しかし、開始から2週間はオンライン授業になりました。中国も厳しい防疫体制を敷いているにも関わらず、7月下旬から、上海市の周辺都市で久しぶりにコロナ患者がでました。その影響で児童生徒は登校ができなくなり、オンラインで自宅での授業になっています。

中国での新型コロナ感染防止対策はとても厳しく、外国から中国に出国する場合は、出発地と到着後のPCR検査はもちろんですが、中国の空港に到着したら専用車で隔離指定のホテルに連れていかれ、2週間の完全隔離をしなければなりません。そして、ホテルの部屋から一歩も外へ出ることは許されません。食事は支給されますが、朝、昼、晩の三食を2週間ずっと弁当です。上海の場合は、2週間のホテル完全隔離の後、自宅でもう1週間の隔離をしなければなりません。

このような時に海外に行くなんてと思うかもしれませんが、観光客は一人もいません。多くは仕事関係や在留許可の手続きなど、どうしても外国を行き来しなければならない人たちです。

そのような厳しい措置をしても、新型コロナ患者が時々出ます。新型コロナ患者が出た場合、その地区は、ほぼロックダウンになり、該当地区住民は全員PCR検査、出張で該当の市に行けば、PCR検査で陰性を確認しないと、その地区から出ることはできません。

中国と日本は、政治の体制が違うので、新型コロナに対する対応も当然違います。しかし、日本の皆さんも新型コロナに感染しないよう一人一人の意識は高いと思いますが、中国の人々も同様に、新型コロナに対する意識はとても高いです。

このような状況では、国の対策はもちろんですが、県や市、地域や学校、そして個人が、できることをやっていかないと、全体として幸せな方向には行きにくいと思います。

城北中の皆さんも、通常の学校生活が送れないこともあると思います。城北中のホームページを見ると、その中で頑張っている生徒の皆さんの姿に心が熱くなります。

日本と中国、距離はありますが、みんなが通常の生活をして、幸せに生きていきたいと思う気持ちは同じです。お互いに励まし合いながら、この苦しい時を乗り越えていきましょう。



国内移動のために病院へPCR検査を受けに来ている人々

<p>上海通信 上海日本人学校 浦東（プードン）校</p>	<p>上越市立城北中学校生徒向け通信 松井的上海</p>	<p>第14号 令和3年 9月 13日 発行者 松井 明</p>
---------------------------------------	---	--

お世話になっている中国の人々①

上海には多くのコミュニティ（地域社会）があります。上海に駐在している日本人の多くは、日本人コミュニティに属しています。例えば、職場、県人会、同好会など、日本人が集まって仕事をしたり、情報交換をしたり、趣味を楽しんだりしています。私もいくつかの日本人コミュニティに属しています。しかし、あることがきっかけで、多くの中国人の方と仲良くなり、お世話になっています。そのきっかけとなったのが于平（ユーピン）さんです。于平さんとの出会いは運命とも言えるものでした。

私は、新潟県人会と青森県人会、福井県人会に入会しています。県人会の多くは、その県とゆかりがあれば入会できます。青森県人会は弟が青森で生活しているから、福井県人会は大学時代に福井で生活していたから、それぞれ入会しています。新潟県人会は当然ですね。青森県人会に参加していた時、一人の男性と話をすることがありました。名前は于平（ユーピン）さん、中国人です。彼は日本語がとても上手でした。私はどこで日本語を学んだのか聞きました。于さんは、「日本の大学に留学していました。」と言いました。以下、于さんとのやり取りです。

- 松井：「どこの大学に留学していたのですか？」
 于さん：「福井大学に留学していました。」
 松井：「えっ、私も福井大学出身ですよ！」「何学部でしたのですか？」
 于さん：「教育学部です。」
 松井：「えっ、私も教育学部ですよ！」「専攻は何ですか？」
 于さん：「技術です。」
 松井：「えっ、私も技術ですよ！」「いつ大学にいたのですか？」

于さんと私が福井大学教育学部技術専攻にいた期間も一致しました。その瞬間、「あ～っ、いたいた！」とお互い同級生であることがわかりました。私が于さんの顔を見てすぐに思い出せなかったのは、于さんは大学時代、授業が終わるとすぐに日本語学校へ通っていたので、私たち日本人学生との関わりが少なかったからです。しかし、お互いの存在は分かっていたのです。

それにしても、福井という地で一緒だった同級生が、30年後に約束もせず大都市の上海の片隅で、2人とは全く関係ない青森県人会で再会するとは、偶然にしては出来過ぎていると思います。これは30年前から約束された運命としか言いようがありません。（この後、于さんに福井県人会を紹介していただいたのです。）

ちなみに于さんは、大学を卒業後、岐阜大学大学院で博士学位を取得。その後、日本のソフトウェア会社に就職してから上海へ戻り、上海でソフトウェアの会社を起業しました。現在、その会社は社員に仕事を任せておけばよいほど大成功し、于さんは自分が成功したのも日本のおかげだと、中国の会社と日本の会社をつなぐ「上海経営者協会」を組織して、中国と日本のビジネスがスムーズにできるようにと奮闘しています。上海経営者協会は月に一度研修会を開き、名刺交換や商談の機会を設けています。私もこの上海経営者協会に招待していただき、多くの日本人ビジネスマンや中国人ビジネスマンと交流をもつことができます。于さんとの30年ぶりの再会が、私の上海生活をより豊かにしてくれています。



30年ぶりの同級生との再会
于平（ユーピン）さん（左）と私（右）

<p>上海通信 上海日本人学校 浦東（プードン）校</p>	<p>上越市立城北中学校生徒向け通信 松井的上海</p>	<p>第15号 令和3年10月4日 発行者 松井 明</p>
---------------------------------------	---	--

お世話になっている中国の人々②

鄭林美（コウ リンミ）先生です。私の中国語の先生です。私が上海に赴任した2019年4月からマンツーマンで中国語を教えていただいています。中国語学習は発音（拼音 [ピンイン] と言う）を覚えることから始まります。中国語の発音は、日本語にはない発音が多く、とても苦労しました。まず、鄭先生の発音が聞き取れません。ようやく聞き取れても、私が発音すると「違う」と言われる。言われた通りに発音しているつもりなのですが、なかなか正確な発音ができません。そのうち、頬や舌が痛くなってきます。中国語の学習を諦めかけたときもありましたが、鄭先生の励まして何とか続けることができました。

上手く発音ができないうちは、実際にお店やレストランで中国語を使って話をして通じません。日本語なら少しくらい発音が下手でも、外国人ということが分かれば、少しは通じると思うのですが、中国語は発音がとても大切で、少しでも違くと全く通じません。中国で生活していくためには中国語の習得は不可欠です。鄭先生の授業を辛くても続けていくと、発音の指摘も少しずつ減ってきました。すると、現地の人々と中国語で少しずつコミュニケーションが取れるようになってきました。

鄭先生は、湖南省の出身です。湖南省は上海から西へ1,000km以上離れた省です。子どもの頃から日本のアニメが好きで「ONE PIECE」や「NARUTO」をよく観ていたそうです。日本のアニメがきっかけで日本語に興味をもち、20歳のときに湖南農業大学日本語専攻で日本語の基礎を学び、24歳で日本へ渡り、武蔵野学院大学国際コミュニケーション科に2年間留学しました。その後、上海にある松下電器（パナソニック）に入社、しばらくして、自分の語学力をさらに生かしたいと日本人向けの中国語の先生になったそうです。

上海で生活をしていると、日本語を話すことができる中国人が多いことに驚かされます。私たち家族が地下鉄やバスで話をしていると（もちろん日本語で）、見ず知らずの中国人に日本語で話しかけられることもあります。また、上海をはじめ中国では、留学をする学生が非常に多く、日本へはもちろん、アメリカやヨーロッパ、オセアニアなど、世界各地で勉強しています。その学生の多くが中国に戻り、外国で学んだ知識や経験を生かして仕事をしています。

私は中学生の時、英語が苦手でした。理由は英語の必要性を感じていなかったからです。「自分は外国へは行かないし、日本へ来る外国人が日本語を覚えればいいんだ。」「なぜ、自分が英語を勉強しなければいけないんだ。」と思っていたのです。しかし、それは間違っていました。インターネットの普及や交通網の発達で、世界の距離は驚くほど近くなっています。その中で、自分の国だけの考えや行動では、今のグローバルな時代を生き抜くことは難しいです。様々な国民や人種、立場の人々とどのように共同、共働、協働して、生きていくべきなのかを考えなければなりません。この歳になっても、まだまだ自分が学ぶべきことは多いです。



鄭林美（コウ リンミ）先生（左）と私（右）

中華料理と言えば・・・② ギョーザ

中華料理の定番の一つが「ギョーザ」です。中国語では「餃子（ジャオズ）」と言います。中国では主食として食べます。つまり、ご飯や麺のような感覚で食べます。

中国の餃子は、形が上にひだがあり半月形です。形は日本の餃子とほぼ同じですが、大きさが小さいです。そして皮は、多くの家庭で手作りします。市場の麺の専門店に、その店の手造りの餃子の皮が売られたりもしています。日本のようにスーパーにも餃子の皮は売られていますが、多くの家庭では小麦粉から作ります。日本のできあいの餃子の皮に比べるともちり・ポテっとして別物感があります。まさに主食で、歯ごたえのある「すいとん」の中に具が入っている感じです。

そして、日本のギョーザとの決定的な違いは、中国では餃子を焼かず、水餃子や蒸し餃子として食べるのがほとんどだということです。中国の北の方は、水餃子として食べるのが多く、南の方は蒸し餃子で食べるのが多いです。また、たっぷりの油を敷いて片面だけを揚げる「煎餃」などがあります。餃子は中国が本場だけあり、多くの種類があります。



餃子（ジャオズ・汁なし）



餃子（ジャオズ・牛骨スープ）



蒸餃（ジェンジャオ）
蒸した餃子です



煎餃（ジェンジャオ）
これは焼いた小籠包（ショーロンポー）に近いです

いわゆる日本で食べているギョーザは「日式焼餃（リーシーシャオジャオ）」と呼ばれ、日本食レストランで食べることができます。

お世話になっている中国の人々③



許建東 (シュ ジェイドン) 先生 (左) と
 私の息子 (中央) と私 (右)

許建東 (許建东:シュ ジェイドン) 先生です。私の息子が通っている将棋教室の先生です。許先生は、1963年生まれで、上海财经大学金融科を卒業し、中国工商银行に勤めました。仕事も順調で、課長まで昇進したころ、外国の資本主義を見てみたいという気持ちが強くなり、周囲の反対を押し切って会社を辞めて日本へ渡ったそうです。日本での生活の中で将棋と出会い、以後、将棋を本格的に学び、アマチュア五段の資格を取るまでになりました。

中国にも象棋 (シャンチー) という、将棋に似たゲームがあります。しかし、象棋の駒は前にしか進めず、いわば攻撃の発想のみです。



中国の象棋 (シャンチー)

しかし、将棋の駒は後ろに下がるので、攻めと同時に守りが求められます。また象棋では相手の駒をやっつける時に「殺す」と表現して、倒した相手の駒は盤上から消えます。これに対して、将棋では「取る」と言って、相手の駒を捕虜として捕らえ、自分の味方につけ、自由に使うことができます。相手を殺してしまうのではなく、生かすことで、最終的には相手をすべて味方につけるという、相手への思いやりにつながるのです。また将棋は、礼に始まり礼に終わる、勝ってもおごらず、負けたら「参りました」と素直に相手の力を認めるなど、対戦相手を尊敬する気持ちや対局中の姿勢など、礼儀作法を大切にしています。特に子どもにとっては、将棋をやることで頭をよく使い、考えるようになるので論理的思考が身につく、学校では数学の成績がよくなるそうです。

上海へ戻った許先生は、この素晴らしい将棋を中国で広めて、子どもたちの教育に役立てたいと、上海市内の小中高校を回り、普及活動を行いました。最初は、なかなか理解されず、学校教育に取り入れてもらえませんでした。ようやく取り入れてくれた最初の学校での教育効果が実証されると、瞬間に将棋を授業や課外活動で取り入れる学校が増えたそうです。ちなみに、中国での将棋は、象棋や囲碁と並んで、頭脳スポーツという体育のひとつに数えられています。ですから、許先生の将棋教室も上海市体育協会に所属しています。

現在、上海市での将棋愛好者は150万人以上に広まり、許先生はこの功績が認められ、2018年に日本将棋連盟から、大山康晴賞 (将棋の普及活動や文化振興に活躍したアマチュアに与えられる賞) を受賞されました。現在でも、上海のみならず中国全体に精力的に将棋の普及に努めていらっしゃいます。



将棋教室が大切にしている人間教育
 「礼・智・雅・悟」の標語

今まで私は将棋には全く縁がありませんでした。上海に来て息子が将棋を習いたいと言ったことで、偶然、許先生に出会うことができました。許先生のように中国人でありながら日本文化の素晴らしさを中国で広めている方がいることを知り、日本人として嬉しい反面、将棋に日本人の考え方や日本文化が凝縮されていることを、私が全く理解していないことに気付かされました。日本も中国も文化や国民性に素晴らしいところがあり、お互いに見習う面があります。まずは人と人が交流をすること、そこからお互いを理解することで、より前向きで豊かな未来が開けると思います。

中学生 中国語・日本語スピーチ大会

11月19日(金)に、中学生 中国語・日本語スピーチ大会が行われました。この大会は、「将来、日本と中国の懸け橋になる子どもが育ってほしい」という願いを込めて、上海日本人学校中学部で毎年行われている行事です。1997年に日中国交正常化25周年を記念して始められ、今回の大会で24回目を迎えました。通常は、体育館で多くの来賓をお招きして盛大に行われる行事ですが、昨年度は、コロナ禍の影響により開催することができませんでした。現在もまだまだ防疫体制の厳しい状況が続き、対面での開催が難しい中、日本と中国の絆を大切にしたいという強い思いのもと、今年度は、オンラインで開催しました。

現地の中学校である「上海市甘泉外国語中学」、「上海外国語大学附属外国語学校」、「上海外国語大学附属外国語学校東校」の代表生徒が日本語でスピーチを、日本人学校の生徒が中国語でスピーチをします。スピーチ内容は自由ですが、現地の生徒は日本のアニメを見て考えたことや、日本へ旅行した時に感じたことを話す生徒が多く、日本人学校の生徒は、上海の生活でのエピソードや思いを話す生徒が多いです。日本人学校からは15人、現地校からは13人がスピーチしました。

上海には、外国語を専門に学ぶ中学校がいくつかあります。もちろん通常の中学校で学習する内容を履修した上で、さらに自分が専攻する外国語を学習します。このスピーチ大会に参加した現地校の生徒は、日本語コースの生徒たちです。とても上手な日本語で、びっくりします。幼い頃から日本へのあこがれをもち、日本語を勉強したいという強い思いをもって、実際に日本語を勉強していることに、日本人としてとても嬉しく、気持ちが熱くなります。

この大会は、上海で両国の中学生が意見交流を図る貴重な場です。お互いが相手の言語で、

自分の考えや夢を豊かに表現することは、相互理解のみならず互いの伝統・文化を学び尊重することに繋がります。そして、身近な隣国である日本と中国が互いの絆を強め、より親交を深めていけたら、両国の幸せに発展します。参加した日本人学校の生徒と現地校の中学生が、将来の日本と中国の友好のさらなる進展の担い手として活躍してほしいと思います。



開会式の様子
スピーチ発表は事前に動画を撮影し、それを各学校、各教室に配信しました



発表した中学部の生徒たちと校長先生、教頭先生
指導して下さった中国語の先生

「障子を開けてみよ、外は広いぞ！」



豊田佐吉（1867～1930）

皆さんはこの言葉を知っていますか。この言葉は、発明王と言われている豊田佐吉さん（1867～1930）の言葉です。佐吉さんは、自動織機（しょっき）を発明し、豊田紡織廠（とよだぼうしょくしょう）という会社を上海に設立しました。紡織とは、糸を紡（つむ）ぎ、機（はた）で布を織ることです。その機（はた）を織機といいます。昔は、むかし話（鶴の恩返しなど）に出てくるように、はた織り機は人力（手と足）で動かしていました。これを佐吉さんが動力で織る自動織機を苦勞しながらもついに開発し、織機や織機でつくった布を売ったのです。当時、布などの繊維素材は日本の重要な輸出産業でした。日本で大成功をおさめた佐吉さんは、初の海外進出として上海に会社をつくらうとします。しかし、周囲の大反対にあいます。その時、佐吉さんは「障子を開けてみよ、外は広いぞ」と周囲を説得します。世界に目を向けることの大切さを教えてくれる有名な言葉です。結果的に佐吉さんは上海で豊田紡織廠を設立し大成功を収め、日本の産業の著しい発展の礎を築きました。



佐吉さんが発明したG型自動織機



私（左）と野田博文館長（右）

ちなみに佐吉さんの長男の豊田喜一郎さんはトヨタ自動車の設立者です。上海豊田紡織廠は、トヨタグループ初の海外進出会社として1921年（大正10年）に設立され、同社の発展は、のちのトヨタ自動車設立の大きな原動力になりました。佐吉さんは1927年に西川秋次さんに後事（こうじ）を託し、帰国します。上海豊田紡織廠は、終戦の1945年まで稼働しました。まさに世界のトヨタのルーツと言える場所です。現在は、記念館になっており、発明王であった佐吉さんの「豊田式木製人力織機」「G型自動織機」の展示もあります。記念館の館長の野田博文さんとは、日本人学校で講演をいただくなど、公私ともに仲良くさせていただいています。

私が佐吉さんに感銘を受けたのは、「障子を開けてみよ、外は広いぞ！」の言葉だけではありません。「まず、官僚外交の前に、国民外交がなければならぬ」や「全人類に対して、一大奉仕をなす覚悟をもって進まねばならぬ。ここまで進めば、日中親善は自然に実現する。」など、当時から国際理解の大切な心構えを見抜いて実践したことです。当時、上海へ進出していた多くの日本の企業は労働者として中国人を雇っていましたが、決してよくはない労働環境での作業を強いていました。しかし、佐吉さんは当時から、仕事や経営を支えているのは人である。お互いの信頼を会社運営の基本とし、中国人のことをよく知り、心を通わせた交流を心掛けていたそうです。

まずは自分から相手に飛び込んでいくこと。そして、相手と直接コミュニケーションをとることで、相手を理解でき、そこから、お互いに幸せな関係が築けると思います。私は上海へ来て2年半が過ぎました。上海に来たことで少しは障子を開けることができたと思います。そして、さらに障子を開けて中国をさらに理解して、私なりの日中友好のかけ橋をつくりたいと思います。

あなたの今のがんばりが、世界の人々を幸せにする

上海日本人学校 松井 明

私は城北中学校に籍を置いて、中国にある上海日本人学校に勤務しています。今回は上海の子どもたちの学習の様子についてお伝えします

中国は過酷な学歴社会で、学歴によって将来の所得が大きく変わります。したがって、中国の子どもたちはとにかく勉強をします。勉強をさせられるという表現が正しいかもしれません。学校では大量の宿題を出され、子どもは学校が終わったら毎日のように学習塾や習い事へ通います。そして、塾から帰ってきてから学校の宿題をこなす……。上海の現地の子どもたちの多くもこのような生活をしています。しかし、そこには課題も多く、中国政府が新しい政策を打ち出したりもしています。

私が勤務している上海日本人学校は、上海では外国籍学校となっており、現地の学校とは違います。上海日本人学校の生徒の多くは日本の会社に勤めている親の海外赴任によって家族と一緒に上海へ来ている子どもたちです。卒業する生徒の多くは日本の高校へ、普通の入試を受けて進学します。日本にいれば、同じ高校を受験しようとする仲間がいたり、中学校が高校受験の情報を教えてくれたりしますが、上海へ来ている生徒は日本全国から来ているので、当然、学校も全国の高校入試の情報を把握してはおりません。したがって、高校入試の情報は、生徒や保護者が自分たちで集めなくてはなりません。そして、入試に向けて十分すぎるくらい勉強して本番に臨みます。入試会場でも、見ず知らずの受験生の中で試験を受けなくてはなりません。また、日本の新型コロナの水際対策措置での帰国後の2週間隔離もあり、日本にいる生徒に比べ勉強以外の苦勞も多いです。だからどのような状況でも、学力だけはつけておかないと、日本にいる中学生には太刀打ちできないのです。海外にいるからこそ、日本にいる同級生に比べてハンデがあることを十分にわかっているのです。上海日本人学校の生徒は、毎日の学校の授業にも集中して臨んでいます。このような中、上海日本人学校の生徒の勉強のがんばりは、高校入試のためだけでなく、将来にもつながるものと思っています。

私は中学生の時、英語が苦手でした。理由は英語の必要性を感じていなかったからです。「自分は外国へは行かないし、日本へ来る外国人が日本語を覚えればいいんだ。」「なぜ、自分が英語を勉強しなければいけないんだ。」とっていたのです。しかし、それは間違っていました。インターネットの普及や交通網の発達で、世界の距離は驚くほど近くなっています。その中で、自分の国だけの考えや行動では、今のグローバルな時代を生き抜くことは難しいです。様々な国民や人種、立場の人々とどのように共同、共働、協働して、生きていくべきなのかを考えなければなりません。私は上海に来て、このような気持ちが特に強くなりました。

このことは城北中学校の生徒も皆さんも同じことだと思います。今、目の前の目標（例えばテストや高校入試など）のためにがんばっている皆さんも、このがんばりがその目標のためだけでなく、将来の自分の大きな糧となる日が来ると信じています。そして、将来の自分だけでなく、自分のまわりの人たちや世界の人々を幸せにすることができると信じています。上海にいる中学生もがんばっています。城北中学校の生徒の皆さんも、毎日の勉強は大変だと思いますが、今が踏ん張りどころです。お互いがんばっていきましょう。



新型コロナ・オミクロン株

世界的に新型コロナウイルス・オミクロン株が猛威を振るっています。上越をはじめ日本全体もコロナ感染者が増加しているニュースを見て、とても心配しています。日本のニュースでも報道されていますが、上海でもオミクロン株が発生し、建物の急な閉鎖や突然の隔離があります。指示があれば必ず従わなければなりません。そのお陰もあり、時々コロナ感染は発生していますが、その場で抑えられていて、上海で大規模な感染は起きていません。

北京2022冬季オリンピック開幕

北京オリンピックが2月4日から始まります。北京から南へ1000Km以上離れている上海でも地下鉄のモニターなどで大会の宣伝が流れるなど、オリンピックムードが漂っています。

日本のニュースでは、オリンピック会場の徹底したコロナ対策を伝えていますが、その様子は決して大げさではなく、上海でも出入国に関して、職員は全員防護服ですし、省をまたぐ移動をする場合は、全員PCR検査の陰性証明が必要です。したがって、病院のPCR検査場はいつも長い行列ができています。

北京オリンピックの感染対策は完全なバブル方式で、選手や報道陣は一般市民と一切関わられません。その中、日本のアナウンサーが、バブルの境界で10m離れた場所にいた一般市民に、大声でインタビューした内容が放送されていました。そのアナウンサーが一般市民にインタビューした感想について「中国と日本には政治的にいくつかの課題がありますが、

一般市民はとてもフレンドリーで、日本人である私たちに対してもとても優しく、友好的です！」と述べていました。

これは私が上海で中国人の皆さんと関わってきた中で感じている感想と同じです。

北京オリンピックの報道で、日本の皆さんに今の中国を少しでも理解してもらい、日本と中国の友好がさらに深まることを願っています。



北京オリンピックの公式マスコットの「ビンドゥンドゥン」(左)と
パラリンピック マスコットの「シュエ・ロンロン」(右)

私が仲良くさせていただいているマスコットキャラクターの箱を作っている会社の中国人の社長さんから、私の息子にとプレゼントしていただきました。

国際交流拠点から



新潟日報社が開設した米ニューヨーク(NY)、ブラジル・サンパウロ、中国・上海、欧州(パリ)の国際交流拠点などを通じ、海外で暮らす本県関係者から現地の様子をレポートしてもらい、毎月第1月曜日に紹介しています。また、新潟日報ホームページ「モア」にも掲載し、感想や意見を受け付けています。

第1月曜掲載

f r o m

上海



松井 明さん

|| 上越市出身 ||



地下鉄2号線東昌路駅付近のビジネス街。多くの人や車でにぎわう

地下鉄の駅からあふれんばかりの人が出てきて、超高層ビルに吸い込まれていきます。道路にもたくさんの車やタクシー、バスが走っており、信号が青に変わると一気に流れていきます。地下鉄の駅からあふれんばかりの人が出てきて、超高層ビルに吸い込まれていきます。道路にもたくさんの車やタクシー、バスが走っており、信号が青に変わると一気に流れていきます。

街のマナー 劇的向上

車はほとんどありません。車は下鉄で席が満席だと「ここに座電気自動車が多く、自転車で代わり電動バイクが主流です。朝の通勤ラッシュは驚くほど静かです。

上海の友人に聞くと、ここ5年です。街にはたくさん日本人食が掲示されていたり、車内モニタ。最近、新潟県産米の輸入は解除されましたが、店頭ではあまり見ません。

上海は地方からも多くの人が仕事を求めて移住しています。中国は一期のひどい状況は脱その中で、代々上海に住んでい上海人はとても優しく世話好きです。私たち家族も上海に赴任したところ、困っていると何度も見ず知らずの上海人に声を掛けられ、助けてもらいました。

中国の方は特に子どもとお年寄りを大切にします。例えば地

今、新型コロナウイルスが世界的に猛威を振るっています。中国は一期のひどい状況は脱その中で、代々上海に住んでい上海人はとても優しく世話好きです。私たち家族も上海に赴任したところ、困っていると何度も見ず知らずの上海人に声を掛けられ、助けてもらいました。(松井さんは1972年生まれ。文部科学省在外教育施設派遣教員として、上海日本人学校浦東校に勤務しています)